

種子島西之表方言における アルファベット関連語彙のアクセント

荒 河 翼

1. はじめに

本稿の目的は、鹿児島県種子島の北部に位置する西之表市西之表地区で話されている方言（以下「西之表方言」）のアルファベット関連語彙のアクセントを明らかにすることである。（以下、「アルファベット」を全て α と略記する。） α 関連語彙とは、「A, B, C…」などの α 単独形、「A チーム、A 組」などの α を前部要素とする α 複合語、「AM、ATM」のような α 頭文字語を指す。

長崎県南部や鹿児島県の大部分などの西南部九州地域では、二型アクセント体系を持つ方言が話されている[3, 7]。二型アクセントとは、「アクセント単位の長さが増えても、対立数が一定数（N）以上に増えていかない体系」と定義される「N型アクセント」の一種で、対立数が2である体系のことである[2]。以下、慣例に従って類別語彙[4]の2拍名詞第1類・第2類に所属する語の大部分が持つアクセント型をA型、それ以外をB型と呼ぶ。

近年、西南部九州二型アクセント諸方言における α 関連語彙のアクセントが研究されており、 α 関連語彙のアクセントを決定する規則が方言間で異なることが明らかにされている。その方言差は表1の形に要約することができる。「？」は報告がないことを表す。

表 1: 西南部九州二型アクセント諸方言の α 関連語彙のアクセント規則 ([1, 6, 8, 10]より)

		α 単独形	α 複合語	α 頭文字語
長崎県	長崎市	A 型	後部要素	B 型
	甕島	A 型	?	前部要素
	黒島大里	A 型	前部要素	?
鹿児島県	薩摩川内市	音節数	前部要素	前部要素
	吹上町	音節数	前部要素	前部要素
	枕崎市	音節数	前部要素	?

まず、長崎市方言と鹿児島県の離島で話されている甕島方言、黒島大里方言では、 α 単独形が全て A 型で実現する[1, 8, 10]。一方、鹿児島県本土の薩摩川内市方言や吹上町方言、枕崎市方言は、 α 単独形のアクセント型の決定にアルファベットの音節数が関与する[1, 6]。具体的には、少数の例外を除いて、 α 単独形が 2 音節以上であれば A 型、1 音節であれば B 型として実現する。

鹿児島県の方言は α 複合語のアクセント型の決定に前部要素のアクセント型が関与するという規則を共有している[1, 6]。それに対して長崎市方言の α 複合語のアクセント型の決定には後部要素が関与するという違いがある[8]。松浦[8]によれば、「～さん」を後部要素とする α 複合語は全て A 型で実現し、「～型」を後部要素とする α 複合語はほぼ全て B 型で実現する。「～チーム、～席」を後部要素に持つ α 複合語には、長崎方言に特有の複合語規則が働き、前部要素である α （単独で常に A 型）が 2 モーラであれば A 型、3 モーラ以上であれば B 型で実現する。

鹿児島県の方言は α 頭文字語のアクセント型の決定にも前部要素のアクセント型が関与し、 α 頭文字語の型は前部要素の型と一致する[1, 6]。一方、長崎市方言の α 頭文字語はほぼ全て B 型で実現する[8]。松浦[8]によると、長崎市方言の外来語のアクセントには、「東京方言においてアクセント核が第 3 モーラ以降にある場合、長崎方言では B 型となる」という対応があり、このような対応は α 頭文字語にも認められるという。松浦によれば、長崎市の α 頭文字語の型がすべて B 型になるのは、東京方言の α 頭文字語は第 3 モーラ以降に核を持つので、長崎方言では B 型で実現されると説明される。

以上のように、先行研究の記述に基づくと、二型アクセント体系を有する諸方言は、 α 単独形のアクセント型が一貫して A 型である方言と、音節数が型を決定する方言とにまず大別することができる。興味深いことにこの類型論的パラメータは、少なくとも表 1 に示した方言に関する限り、別の独立した類型論的特徴と相関している。すなわち、個々の型（A 型、B 型）の音調型（高低パタン）を計算する際に参照される韻律的単位—いわゆる「数える単位」—の方言差である。 α 単独形のアクセント型が一貫して A 型である方言は、数える単位がモーラである[8, 10, 11]。（例えば長崎市方言の A 型は初頭 2 モーラが高い。）それに対して、 α 単独形のアクセント型が音節数によって決定される方言は、数える単位が音節である[1, 6, 11]。（例えば吹上町方言の A 型は次末音節が高い。）以上は(1)に示す仮説 I の形に要約することができる。

(1) 仮説 I（数える単位と α 単独形のアクセント決定規則との相関）

- a. 数える単位がモーラ → α 単独形 A 型
- b. 数える単位が音節 → α 単独形音節数関与（1 音節→A 型、2 音節→B 型）

さらに、 α 複合語および α 頭文字語のアクセント型決定規則も、他の類型論的特徴から予測できる可能性を指摘することができる。鹿児島県の諸方言はこれらの語の型を前部要素の型が決定するが、長崎市方言はそうではない。この方言差は、複合名詞のアクセント

規則と方言差と相関している可能性がある。すなわち、鹿児島県の諸方言は、複合名詞の前部要素の型が、全体の型を決定するという規則（以下、「平山の法則」と呼ぶ）を共有している[2, 6, 7, 10, 11]。一方、長崎市方言では平山の法則は成立せず、前部要素の型の他に前部要素のモーラ数が複合名詞の型に関与する[8]。したがって、 α 複合語および α 頭文字語のアクセント型に関して仮説 II を立てることができる(2)。

(2) 仮説 II (複合名詞のアクセント規則と α 複合語・ α 頭文字語のアクセント決定規則との相関)

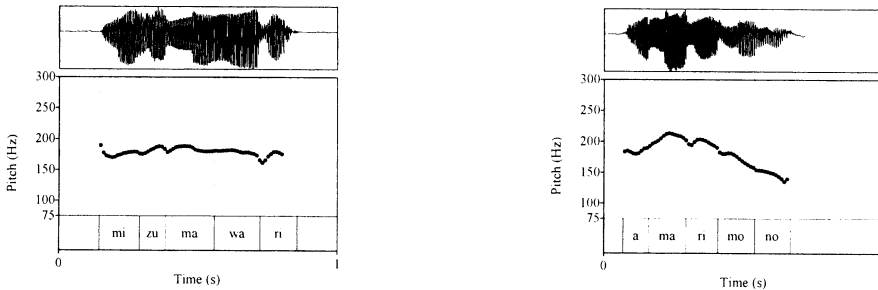
複合名詞に平山の法則が成立 → 前部要素が α 複合語・ α 頭文字語の型を決定

本研究は西之表方言を対象としてこれらの仮説を検証する。西之表方言は二型アクセント体系を持つことが明らかにされているが[3]、 α 関連語彙のアクセントについてはこれまで報告が無い。以下第 2 節では西之表方言のアクセント体系を概観する。

2. 西之表方言のアクセント

筆者の分析によると、西之表方言の A 型は、第 1 モーラから第 2 モーラにかけてピッチが上昇し、その後ピッチの急激な下降が無い型(3a)である。一方、B 型は第 1 モーラから第 2 モーラにかけてピッチが上昇し（第 2 モーラにピーク）、その後最終モーラに向かってピッチが下降する型(3b)である。以降、[はピッチの上昇、] はピッチの下降を表す。

(3) 西之表方言におけるアクセント型の音声実現（基本周波数(F0)曲線と音声波形）



a. A 型 5 モーラ語「水まわり」(ミ[ズマワリ) b. B 型 5 モーラ語「余り物」(ア[マ]リモノ)

また、(4)に示す B 型語の音調から、西之表方言の数える単位はモーラであることが分かる。

(4) 西之表方言 B 型語の音声実現（. はモーラ境界を表す。）

- | | | |
|-------------|---------------------|--------------------|
| a. 撥音 | エ.[ホ].ン.ダ.ナ (絵本棚) | [リ.ン].ゴ.ア.メ (リンゴ飴) |
| b. 長音 | ブ.[ド].ー.ガ.リ (ブドウ狩り) | [ユ.ー].ザ.イ (有罪) |
| c. 二重母音第二要素 | オ.[モ].イ.ヤ.リ (思いやり) | [カ.イ].イ.ン (会員) |
| d. 促音 | ノ.[ミ.ッ].プ.リ (飲みっぷり) | ガ.ッ.[シヨ].ー.ブ (合唱部) |

前述したように B 型は第 2 モーラにピークを持つ。もし西之表方言の数える単位が音節であるならば、第 2 モーラに撥音、長音、二重母音第二要素がある場合、第 2 音節に属するモーラ、すなわち第 3 モーラがピークを持つはずである。しかし実際はそうではない。ピークは第 1 音節に属する第 2 モーラにある。(ただし西之表方言ではこの場合、第 2 モーラのみが卓立するのではなく、第 1・第 2 モーラが高く実現される。) このことはこの方言の数える単位がモーラであることを示している。ただし、第 2 モーラが促音の場合は例外で、ピークは第 3 モーラに現れる。したがって、仮説 I は、西之表方言における α 単独形のアクセント型が全て A 型となることを予測する。

西之表方言の複合名詞には平山の法則が成立する(5)。

(5)西之表方言の複合名詞のアクセント型

ハ[コ (A 型、2 モーラ) + ニ[ワ (A 型、2 モーラ) → ハ[コニワ (A 型、4 モーラ)
 [ウ]ラ (B 型、2 モーラ) + ニ[ワ (A 型、2 モーラ) → ウ[ラ]ニワ (B 型、4 モーラ)
 ナ[ゴヤ (A 型、3 モーラ) + ミ[ヤ]ゲ (B 型、3 モーラ) → ナ[ゴヤミヤゲ (A 型、6 モーラ)
 ナ[ガ]ノ (B 型、3 モーラ) + ミ[ヤ]ゲ (B 型、3 モーラ) → ナ[ガ]ノミヤゲ (B 型、6 モーラ)

(5)のように、前部要素のアクセント型によって複合名詞全体のアクセント型が決定し、前部要素のモーラ数、後部要素の型とモーラ数は型の決定に関与しない。したがって、仮説 II は、西之表方言における α 複合語・ α 頭文字語のアクセント型は前部要素の型によって決定されることを予測する。

3. 調査手法

3.1 話者

言語形成期を西之表市西之表で過ごした 2 名(6)を対象に調査を行った。(調査地は鹿児島県種子島の西之表市西之表地区(下西校区、榕城校区)であった。) 類別語彙[4]約 570 語を調査した結果、2 人のアクセント型の分布には顕著な差異がないことが確認された(アクセント型の一致率約 95%)。

(6)話者

話者 1: 1948 年生まれ 調査時 65 歳 女性 (下西校区)

話者 2: 1948 年生まれ 調査時 66 歳 女性 (榕城校区)

3.2 調査語

調査には α 単独形 26 語と α 複合語 104 語、 α 頭文字語 52 語 (2 文字 26 語、3 文字 26 語) を用いた。 α 複合語は α 単独形それぞれに「～さん」、「～組」、「～席」、「～チーム」を後続させたものを用いた (26×4=104)。 α 頭文字語は [6, 8] で使用されたものをもとに、いくつか差し替え、追加を行った。例えば、先行研究では「R」や「Z」から始まる頭文字

語が調査語に含まれていなかったが、本研究では全ての α から始まる頭文字語を用意した。

3.3 録音と分析手順

録音は2014年7月に鹿児島県西之表市にある話者の自宅等で、AKG社製コンデンサマイクロフォン C420、および Marantz 社製レコーダ PMD661 を用いて行った。型の判定は、筆者の聴覚印象、および音声分析ソフト Praat [9]を用いて、音声基本周波数 (F0) の視認によって行った。

4. 結果

4.1 α 単独形

まず、参考として話者1の α 単独形の音声実現の例を図1に示す。

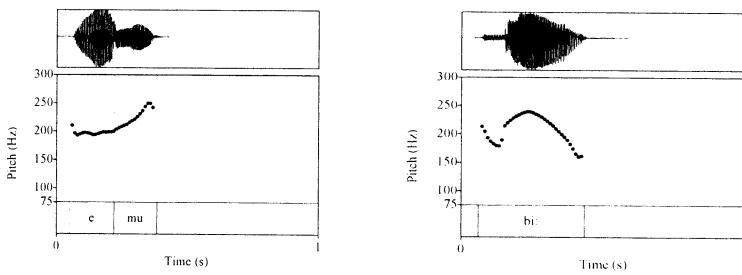


図1：話者1の α 単独形の音声実現（左：M（A型）、右：B（B型））

α 単独形のアクセント型は、図2のように実現した。

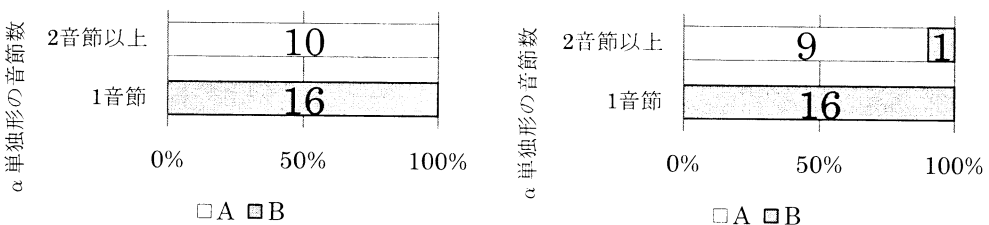


図2： α 単独形のアクセント型（左：話者1、右：話者2）

2名の話者ともに2音節以上の α は、ほぼ全てA型で実現した。「H」は2名ともA型とB型で揺れが見られたが、話者1はA型、話者2はB型の実現が多かったため、それを代表型とした。2名とも、「H」をエッチと発音する場合はA型、「エイチ」と発音する場合はB型で実現する傾向が見られた。2名とも、1音節の α は全てB型で実現した。話者2は、「Q」のみをA型で実現することがあったが、話者の内省によるとB型がより自然であるということで、B型を代表型とした。

以上、西之表方言における α 単独形の型は、 α 単独形の音節数が決定することが明らかとなった。具体的には、 α 単独形が1音節であればA型で、2音節以上であればB型で実現した。

4.2 α 複合語

まず、参考として話者1の α 複合語の音声実現の例を図3に示す。

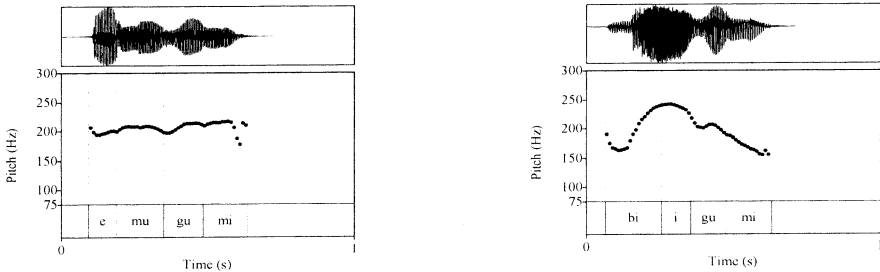


図3：話者1の α 複合語の音声実現（左：M組（A型）、右：B組（B型））

α 複合語のアクセント型の結果は図4のとおりである。

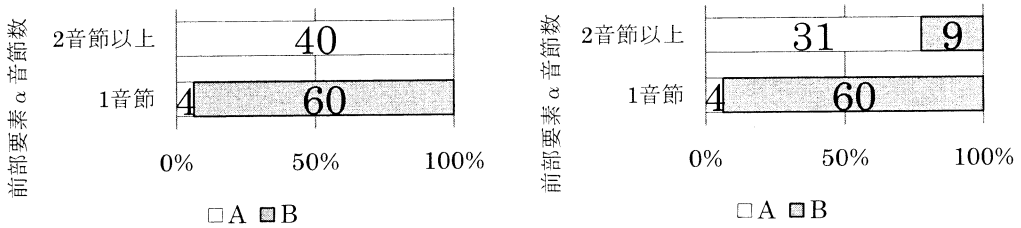


図4： α 複合語のアクセント型（左：話者1、右：話者2）

前部要素が2音節以上の α 複合語を、話者1は全てA型で実現したが、話者2は9語をB型で実現させた。話者2がB型で実現した語には「H」から始まる複合語4語に加えて、他の5語があったが、それら5語に共通性は見つからなかった。2名とも、前部要素の α が1音節であればほぼ全てB型で実現した。A型で実現した4語は全て「Q」を前部要素とする複合語であった。これらにはB型の実現も揺れとして見られたが、話者の内省ではA型が自然であるということからA型を代表型とした。

以上、西之表方言における α 複合語の型は、前部要素の α の音節数が決定することが明らかとなった。具体的には、前部要素の α が1音節であれば複合語全体もA型で、2音節以上であれば複合語全体もB型で実現した。

4.3 α 頭文字語

まず、参考として話者 1 の α 頭文字語の音声実現の例を図 5 に示す。

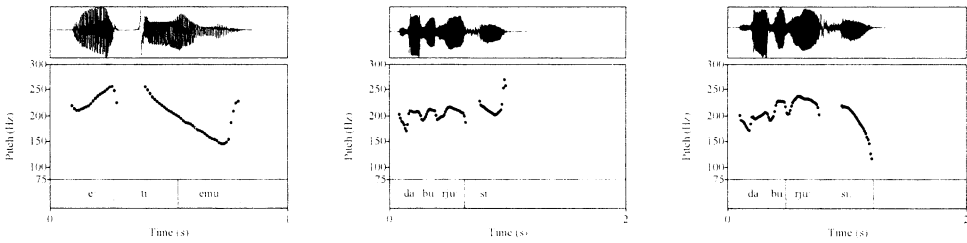


図 5：話者 1 の α 頭文字語の音声実現（左：ATM（B 型 1 単位形）、中央：WC（A 型 1 単位形）、右：WC（2 単位形、A 型+B 型））

α 頭文字語のアクセント型の結果は図 6 のとおりである。

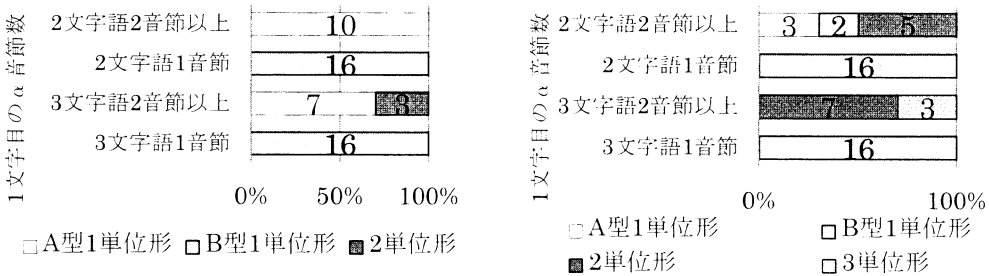


図 6：α 頭文字語のアクセント型（左：話者 1、右：話者 2）

一部の α 頭文字には、語が 2 つ以上のアクセント単位が分割される現象が観察された。例えば、「HB」は[エイ]チ/ビ—（B 型+B 型）、「ZF」はゼッ[ト/エ]フ（A 型+A 型）と実現されることがあった。（以下、/ はアクセント単位境界を表す。）以後、アクセント単位の分割がない形を「1 単位形」、分割があるものを「多単位形」と呼ぶ。アクセント単位の数が 2 の物は「2 単位形」、3 のものは「3 単位形」と呼ぶ。多単位形で実現される語のアクセント型は、それぞれのアクセント単位の先頭に位置する α の（単独形の）アクセント型と一致した。例えば、前述のとおり、「HB」と「ZF」は、[エイ]チ/ビ—（B 型+B 型）、ゼッ[ト/エ]フ（A 型+A 型）のように実現した。

まず、1 文字目の α が 1 音節の頭文字語を検討しよう。この頭文字語は、2 名とも、2 文字語、3 文字語の違いに関わらず、全ての語を B 型 1 単位形で実現した。

次に、1 文字目の α が 2 音節以上の頭文字語の検討に移ろう。2 文字語の場合、話者によって結果が大きく異なった。話者 1 は全ての語を A 型 1 単位形で実現した。「NG」と「WC」は A 型 1 単位形の他に、B 型 1 単位形と 2 単位形（A 型+B 型）の実現がそれぞれ揺れとして現れた。一方、話者 2 は「FM」、「LL」、「SL」を A 型 1 単位形で実現したが、その

他は2単位形で実現した。この話者がA型1単位形で実現する語は、すべて東京方言で無核型になるものである。「MD」と「NG」はB型1単位形で実現した。この2つの語は「LLH」という音節構造を共有している（ここで、Lは軽音節、Hは重音節を表す）。

一方、3文字語にも話者による差が観察された。話者1は「FBI（エ[フビーアイ、A型]）」のように、ほぼ全てをA型1単位形で実現したが、一部の語を「RKB（[アール/ケー]ビー、A型+B型）」のような2単位形で実現した。それに対して話者2には1単位形が全く現れず、ほとんどが2単位形で実現した。また、「LED」（エ[ル/イ]ー/ディ]ー、A型+B型+B型）のように3単位形の実現も見られた。それぞれのアクセント単位のアクセント型が、単位頭に位置する α のアクセント型と一致する点は2文字語と同様である。加えて、3文字語2単位形におけるアクセント単位の分割の仕方には一貫した規則性が見られた。すなわち、分割のパターンは、1文字目を1単位に、残りの2文字を1単位にする「1+2」のパターンに限られた。

以上、西之表方言における α 頭文字語の型は、アクセント単位の先頭に位置する α の音節数によって決定される強い傾向が観察されることが明らかとなった。

5. 考察と結論

分析の結果、西之表方言の α 単独形のアクセント型は、数える単位がモーラであるにも関わらず、数える単位が音節である鹿児島県本土の諸方言と同様、音節数によって決定されることが明らかとなった。このことは、 α 単独形のアクセント規則と方言の韻律的単位は必ずしも相関しないことを意味する。したがって仮説Iは支持されない。本研究の結果は、鹿児島県本土の諸方言の α 単独形のアクセント型が音節数によって決定される原因は、数える単位が音節である事実にはないことを示唆している。

表2： α 単独形のアクセント規則と数える単位による諸方言の分類

		α 単独形	数える単位
長崎県	長崎市	A型	モーラ
	甕島	A型	モーラ
鹿児島県	黒島大里	A型	モーラ
	薩摩川内市	音節数	音節
	吹上町	音節数	音節
	枕崎市	音節数	音節
	西之表	音節数	モーラ
?	?	A型	音節
?	?	B型	モーラ
?	?	B型	音節

表 2 は先行研究と今回の調査結果を要約したものである。西之表方言は、西南部九州二型アクセント方言の中で、これまで報告されていない 1 類型をなす。α 単独形のアクセントと数える単位の方音差という 2 つのパラメータによる類型論は、網掛け部分で示した類型の存在を予測するが、そのような類型は、現時点で見つかっていない。この類型が存在するのか、さらなる調査が求められる。

西之表方言の α 複合語のアクセント型は、ほぼ一貫して前部要素の α のアクセント型 (1 音節なら B 型、2 音節以上なら A 型) が全体の型になることが明らかになった。すなわち平山の法則が成立する。α 複合語に関する限り、仮説 II は支持される。ただし前部要素の α が「Q」の α 複合語 4 語は例外で、2 名の話者ともに B 型と A 型の両方で実現した。

一方、α 頭文字語のアクセント型も前部要素の α のアクセント型 (1 音節なら B 型、2 音節なら A 型) によって決定される強い傾向が観察されたが、「MD」と「NG」は平山の法則の例外となる実現をした。すなわち、これらは 2 音節の α から始まる頭文字語であるにも関わらず B 型 1 単位形で実現した。現段階ではなぜこれらの語が B 型 1 単位形で実現するのか不明であるが、これらの語が「LLH」という音節構造を共有している事実を指摘することができる (L は軽音節、H は重音節を表す)。今後、この音節構造を持つ α 頭文字語のアクセントを詳細に調査する必要がある。α 頭文字語には、他の α 関連語彙には見られない特徴、すなわち多単位形の出現が認められた。多単位形は、アクセント単位が 2 つ以上に分かれる実現形であるが、その際、それぞれのアクセント単位のアクセント型は、単位の先頭に位置する α のアクセント型と一致する。また、3 文字語 2 単位形のアクセント単位の分割の仕方は 1+2 のパターンばかりであった。第 1 要素の α が 2 音節以上、すなわち A 型のものは、第一要素の α が B 型の頭文字語に比べ、より多く多単位形として実現した。いずれにせよ、1 単位形の場合は平山の法則が成立するので、概して仮説 II は支持されたと言えるが、多単位形の出現を支配する原理が何なのかは不明のままである。今後更なる調査を行う必要がある。

引用文献

- [1] 上野善道 (2005) 「日本語方言のアルファベット関連語彙のアクセント」『東京大学言語学論集』24, 171-196.
- [2] 上野善道 (2012) 「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1), 44-62.
- [3] 木部暢子 (2000) 『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.
- [4] 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と手法』塙書房.
- [5] 窪菌晴夫 (2007) 「レキシコンとアクセント指定—鹿児島方言の外来語アクセント—」影山太郎編『レキシコンフォーラム No.3』ひつじ書房.
- [6] 窪菌晴夫・木部暢子 (2004) 「鹿児島方言のアルファベット語アクセントについて」窪菌晴夫(編)『プロソディーにおける多様性と普遍性に関する総合的研究(2)』, 1-22(科研費報告書 No.14310222).

- [7] 平山輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』 学界之指針社.
- [8] 松浦年男 (2014) 『長崎方言からみた語音調の構造』 ひつじ書房.
- [9] Boersma, Paul & Weenink, David (2013) Praat: Doing phonetics by computer [Computer program] . Version 5.3.56, from <http://www.praat.org/>.
- [10] Kubozono, Haruo (2010) Accentuation of alphabetic acronyms in varieties of Japanese. *Lingua* 120, 2323-2335.
- [11] Uwano, Zendo (2004) Three Varieties of Two-pattern Accent systems of Japanese Dialects. 『東京大学言語学論集』 23, 273-290.

謝辞

本稿で行ったアクセント調査は国語研プロジェクト「日本語レキシコンの音韻特性（代表者：窪菌晴夫）」からの支援を受けて遂行された。